



福島成蹊中高一貫

学校通信

令和元年10月7日
令和元年度
第7号

私にとっての音楽の先生

校長 本田 哲朗

仲秋を迎え、秋もめっきりと深まった感じがする。前稿でレオナルド・ダ・ヴィンチに触れたので、余り知られていない所に対し、少しだけ付け加える事を許していただきたい。小国がせめぎあう状況下にあった当時、彼は共和制のフィレンツェから、外交手段としてミラノ公国に贈与される。レオナルド御年30歳の時である。メディチ家からスフォルツァ家へ“貢ぎ物音楽家”として、ミラノに送り出されたのだ。これに対し、レオナルド本人はこの事を否定もしていないし、実際にもリラ(楽器名)の名奏者だった。ちなみに、自己アピール書の末隅に、控えめに絵画も出来ると記している。私達はモナリザや最後の晩餐に代表される画家としての才能を第一に思い浮かべるが、本人は他に、寸劇の台本脚・舞台装置・脚色・演出に衣装のデザインと多彩に才能を発揮した。勿論、音楽についても“目に見えぬものの表現”として、高い評価を与えられている。

ところで、あまり耳にする事が少なくなったが、以前は良く使われた言葉に「分相応」があった。この言葉が生きているころ、私は分不相応の事をやった事になる。二人の子供が宮城県で生活をした頃、我が家にはピアノが二台あったのである。きっかけは、上の娘がピアノをはじめ、どういう訳か弟もやりたいと言い出した。元々音楽は大変好きだったので、拒む理由も見つからずやらせることにした。バイエル…チェルニー…ブルクミュラー…と進む過程で、家に音楽がある良さを実感した。更に進むと一台で交互に練習することが不可能になった。インベンション…シンフォニア…平均律…ともなると、なる程と思える様になったからである。この頃になると、弾き事に加え聴音も必要になってくる。曲目もだんだんと音楽で教わった作曲家の曲を弾くようになった。例えばスカルラッティ・バッハ・ヘンデル・ハイドン・モーツァルト・ベートーベン…と、古典派とロマン派ではショパン・リスト・ブラームス・シューマン・メンデルスゾーン…ラフマニノフ…近現代ではプロコフィエフ・スクリャービン・バラキレフ…etc。また、子供自身深みを求めて、考え・悩み・工夫を凝らし、何度も試しながら曲に向かう様になって来たからである。従って、ベートーベンの同じソナタを聴き比べても、二人の弾き方が全く異なる事に驚いた。

思うに、恐らくこの環境に浴さなければ、音楽の楽しみ方が随分違ったものになっていたに違いない。正式に音楽教育を受けた息子には及ばないが、クラシック音楽に対する歴史認識(特に時代や作曲家の人間関係等)や、味わい方がいつの間にか体に染みついていて感じるのである。また、クラシック音楽が現代音楽に及ぼしている影響や、CMで流れるアレンジメントされた曲を耳にする度に、それらの原流をたどるのである。

私は自然科学を学んだ人間だが、数学にせよ化学にせよ学ぶ事とは、結果的にその分野の歴史をなぞる事になる。その意味では音楽も全く同様に、体系としてとらえる事が出来るのだ。

